

今週の為替相場見通し(2025年8月25日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		146.58 ~ 148.77	146.91	144.00 ~ 149.00
ユーロ	(ドル)		1.1583 ~ 1.1742	1.1720	1.1640 ~ 1.1800
(1ユーロ=)	(円)		171.12 ~ 172.70	172.26	170.80 ~ 174.00
英ポンド	(ドル)		1.3393 ~ 1.3562	1.3522	1.3300 ~ 1.3600
(1英ポンド=)	(円)	*	197.87 ~ 200.27	198.73	196.00 ~ 201.00
豪ドル	(ドル)		0.6415 ~ 0.6524	0.6491	0.6400 ~ 0.6600
(1豪ドル=)	(円)	*	94.40 ~ 96.20	95.38	94.50 ~ 97.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

国際為替部 為替営業第一チーム 大島 経貴

(1)今週の予想レンジ: 144.00 ~ 149.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

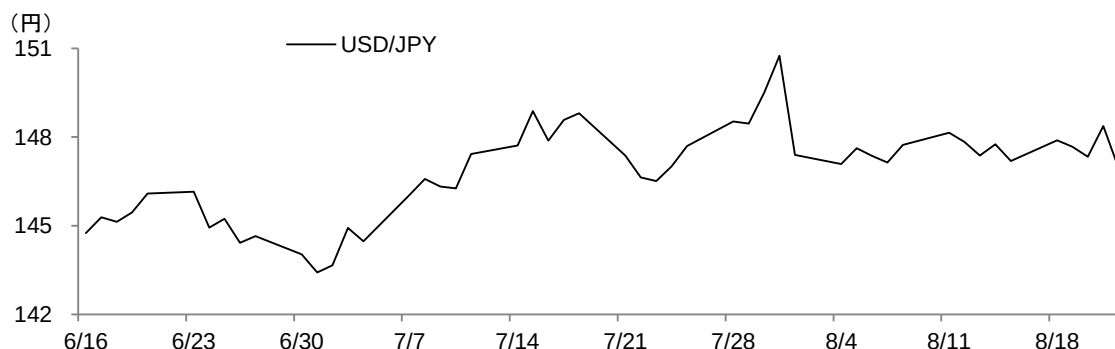
先週のドル/円は、週後半にかけて円安が進行したが、週末のパウエルFRB議長のジャクソンホール会議での講演を受け、急落する展開。週初18日、147.23円でオープンしたドル/円は材料難の中、じり高の推移。米金利の上昇が下支えとなり147円台後半まで続伸した。19日、米大手格付け機関による米国信用格付け据え置きが報じられると一時148円台へ乗せるも、すぐに反落。その後はまちまちの結果となった複数の米経済指標が発表されるも反応は限定的、147円台後半で上値重く推移。米株、米金利の軟調な展開を受け147円台前半へ下落した。20日、前日の流れを引き継ぎドル売りが優勢の中、NY時間はトランプ米大統領によるクックFRB理事への辞任要求に加えて、米株、米金利の低調な推移が材料視され147円を割り込み続落した。21日、前日の下落を受け買戻しが入り、じり高の推移。軟調な結果となった米経済指標を受け小幅に反落する場面が見られるも、その後米8月PMIの市場予想を上回る好調な結果となると148円台へ反発した。22日、一時週高値となる148.77円をつける場面もあったが、基本的にはジャクソンホール会合を控え148円台での方向感無い推移。ジャクソンホール会合でパウエルFRB議長が米労働市場の悪化を懸念する発言を受け、米利下げ観測が強まると米金利と共にドル/円も急落、週安値となる146.58円まで下落し、結局146.91円でクローズした。

今週のドル/円は上値重い推移を予想する。先週末、ジャクソンホール会合にて行われたパウエルFRB議長の会見では、雇用に対する下振れリスクの高まりを指摘。政策見通しとリスクバランスの変化が政策スタンスの調整を正当化する可能性があると言及した、米利下げ再開が示唆されたことで、米金利、ドル/円共に急落しており、今週もドル/円の上値を抑えるだろう。ただし、留意したいのは政策スタンスの変更についてあくまで「慎重に」進むことが可能になると指摘している点だ。現状市場では既に9月FOMCでの▲25bpの利下げが8割超織り込まれているが、わずかに意識されていた▲50bpの利下げの可能性は現時点では小さいと考えており、ドル/円のこれ以上の大幅な下落は考えづらい。係る状況下、今週は29日(金)に米7月PCEデフレーターが公表される。本来Fedが重視するインフレ指標であるものの、Fedの二大責務の中で労働市場のリスクがより強く意識される中で、ドル/円への影響は限定的と見ている。また今週は多くのFed高官の発言機会が用意されており、彼らの政策パスへの姿勢も注意したい。

(3)先週末までの相場の推移

先週(8/18~8/22)の値動き:

安値 146.58 円 高値 148.77 円 終値 146.91 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

国際為替部 為替営業第一チーム 山田 隆広

(1) 今週の予想レンジ: 1.1640 ~ 1.1800 170.80 ~ 174.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは週を通じてじり安も、パウエルFRB議長のジャクソンホール会議での講演を受け、急騰する展開。週初18日、ユーロ/ドルは東京時間1.1705でオープンし、米金利上昇に連れられて1.16台後半までじり安の展開。19日、新規材料に乏しいなかユーロ/ドルは1.16台後半で方向感なく推移。20日、独7月PPIの軟調な結果やトランプ米大統領によるクックFRB理事への辞任要求などを受けて、ユーロ/ドルは1.16台半ばでもみ合い。21日、ユーロ圏の各国PMI速報値は概ね市場予想通りとなるも、複数のFed高官によるタカ派的な発言や堅調な米経済指標の結果などから9月FOMCでの利下げ観測が後退し、ユーロ/ドルは1.16近辺まで下落。22日、前日のドル買い地合いを引き継ぎユーロ/ドルは週安値1.1583まで下落。しかしパウエルFRB議長がジャクソンホール会議での講演において、トランプ関税によるインフレを警戒しつつも雇用の下振れリスクを指摘したことで9月FOMCにおける利下げ観測が再び高まり、ユーロ/ドルは週高値1.1742まで急伸し、1.1720で越週。

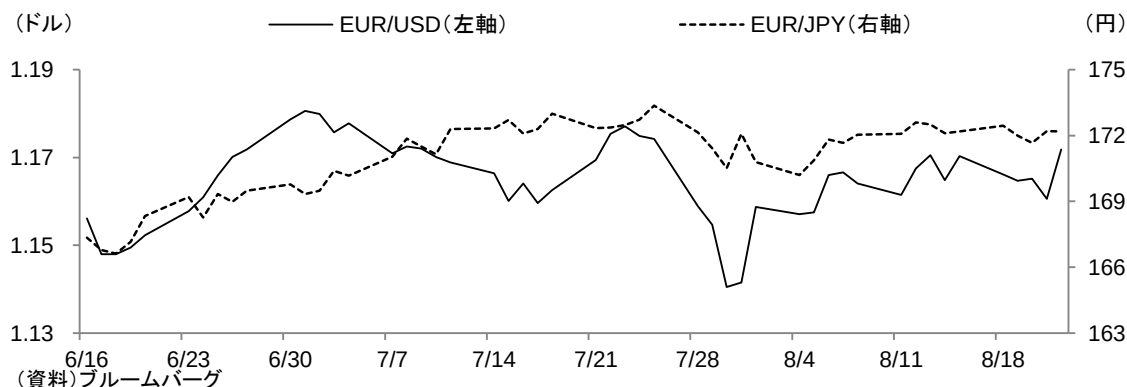
今週のユーロ/ドルは堅調な推移を予想。ジャクソンホール会議を終えて、利下げに舵を切るFRBと利下げ停止が見込まれるECBとの対比からユーロが買われやすいとみる。併せて、トランプ米大統領による次期FRB議長選定やFOMCメンバー内の意見対立が鮮明化しているもとでは、ドル買い動意は薄かろう。今週は25日(月)に独8月IFO企業景況感指数、29日(金)に独8月CPI速報値の発表が予定。先週発表された独7月PPIの弱含みや独25年4～6月期GDP改定値が前期比▲0.3%減と速報値から下方修正されたことなどから、ドイツの景気減速が示唆されている状況。もっとも、ラガルドECB総裁は、先週の講演にてユーロ圏の景気減速は4～6月期で明白であり7～9月期の成長は鈍化するとの見通しを示しており、経済指標の市場予想比下振れリスクは想定する必要があるものの、財政拡張などを背景に将来的なユーロ圏の景気回復期待は不変であろう。また、ラガルドECB総裁は9月の経済見通しが今後数か月の意思決定の指針になるとも発言しており、しばらくは年内1回と見込まれる追加利下げ時期を探りつつも利下げサイクルの終了が意識され、ユーロは底堅く推移すると思われる。なお、28日(木)には7月ECB政策理事会議事要旨の公表が予定も、8会合ぶりの利下げ見送り決定は事前予想通りの結果であったため、特段のサプライズは想定しておらず市場に与える影響は限定的と考える。米国サイドで控える複数の個人消費関連指標の発表も踏まえ、9月FOMCでの利下げが十分に織り込まれるなかでは、ドルが売られ相対的にユーロが買われやすい地合いと見ている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/18～8/22)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1583 高値 1.1742 終値 1.1720

(対円) 安値 171.12 高値 172.70 終値 172.26



3. 英ポンド

欧州資金部 神田 史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.3300 ~ 1.3600 196.00 ~ 201.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は上値重いながら堅調推移。週初18日は1.35台半ばで始まる。市場参加者の夏休みで薄商いの中、全般にドルが堅調。19日は、米テック株下落の中、ドル堅調継続で1.34台に。20日は、英7月CPIが予想を上回ると1.35台へ反発も勢い続かず。21日は英8月サービス業PMIが予想を上回ったことを受けて上昇するも1.3500は重い。米8月PMIの堅調な結果に1.34レベルへ。週末22日は米ジャクソンホールでのパウエルFRB議長の講演がハト派的であったことで1.35台まで反発した。英ポンドは対円で方向感ない展開。18日に199円台半ばで始まる。米テック株の下落に起因したリスク回避モードに上値重い展開が続く。20日には一時198円を割り込むも、堅調なドル/円につれて再上昇すると、22日には199円台を回復したが、パウエルFRB議長の発言後のドル/円の下落につれて程なく198円台に下落した。

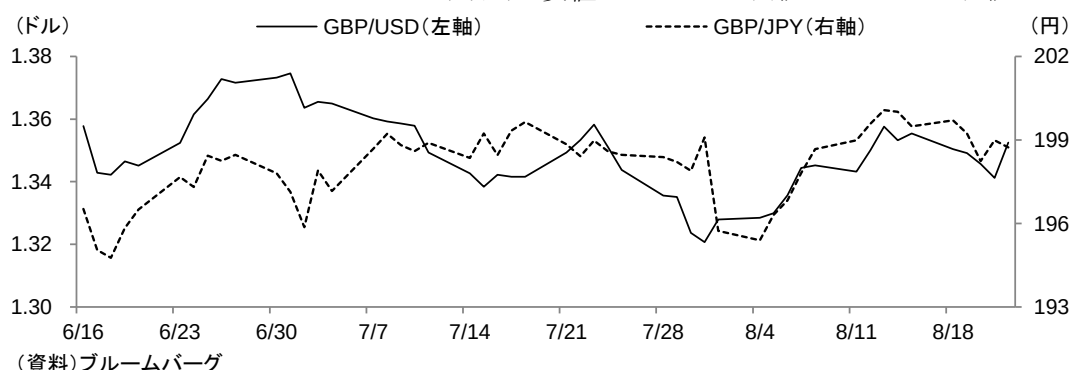
今週の英ポンド相場は、上値重いながら堅調推移継続を見込む。先週20日の英7月CPIは引き続き英中銀の見通しを上回る結果で、利下げペースの加速は見込みにくい。スワップ市場では9月利下げについてはほぼゼロ織り込みで、年内利下げも4割を切っている。指標面では英側からは特段の材料はなし。米指標が幾つか予定されているため、ドル要因での変動が見込まれるが、ジャクソンホールでのパウエルFRB議長の発言もあり、トレンドに大きな変化はないと見込んでいる。ちなみにオプション市場で観測されるインプライド・ボラティリティは今週の英ポンドの対ドル変動をおよそ上下1%程度と見込んでいる模様だ。なお25日(月)はサマーバンクホリデーで英休場となる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/18~8/22)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3393 高値 1.3562 終値 1.3522

(対円) 安値 197.87 高値 200.27 終値 198.73



4. 豪ドル

国際為替部 為替営業第二チーム 西 拓也

(1) 今週の予想レンジ: 0.6400 ~ 0.6600 94.50 ~ 97.50 円

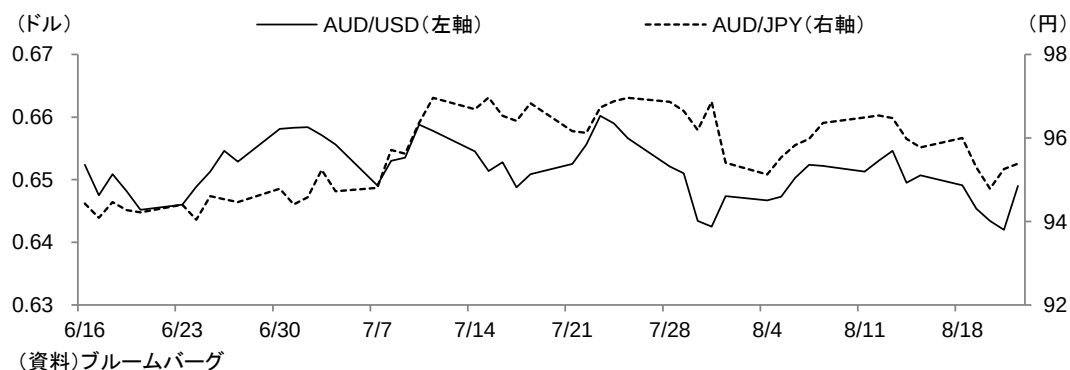
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は下に往って来い。週初18日、0.65台前半でオープン。東京時間は米金利低下を横目に週高値となる0.6524まで上昇も、海外時間にかけては米金利の反転上昇や銅価格の下落を背景に0.6500を割り込んだ。19日、東京時間は米ソブリン格付据え置きとの報道にドル買い優勢となる場面もあったが、豪ドル相場への影響は限定的。海外時間、大型ハイテク株主導の米株下落が重しとなり、0.64台半ばへ。20日、前日からの流れで先物含めて米株が軟調に推移する中で米国時間には0.64台前半へじり安の展開。トランプ米大統領によるクックFRB理事辞任要求を背景としたドル売りの影響は限定的だった。21日、ここ数日の下落地合いが継続し、上値重く推移。0.6415が週安値となった。ただ、米8月PMI速報値の堅調な結果にも関わらず豪ドル相場の下値は堅く、0.6415をバックに0.6420台での揉みあいとなった。22日、東京時間から欧州時間にかけてはジャクソンホール会合におけるパウエルFRB議長講演を前に方向感なく推移。注目されたパウエルFRB議長の講演ではインフレ懸念が残る中でも労働市場へのリスクが高まっていることを指摘され、慎重ながらも利下げ示唆との受け止めから、米金利低下、ドル売りで反応。今週の下げ幅を0.6500まで縮小し、結局0.6491で越週した。

今週の豪ドル相場はやや軟調な推移を予想。先週金曜日のパウエルFRB議長のコミュニケーションは事前予想対比ハト派的と受け止められたが、米利下げ織込みは依然として9月会合で0.8回程度、年内2回程度とジャクソンホール会合前後で状況が大きく変わったわけではない。パウエルFRB議長は雇用環境の悪化だけでなくインフレ懸念の高止まりにも言及しており、再びデータ待ちのフェーズに移ることとなった。一方、豪州に関しては今月のRBA会合(11~12日開催)でブロック総裁はインフレ率が目標である2~3%の中央値に向けた継続的な低下基調にあること、労働市場が緩和していることを利下げ決定の背景として説明している。RBAは利下げ継続の可能性が高いと考えているが、今週26日(火)に公表される8月RBA理事会の議事要旨において、積極的な利下げ姿勢が確認されれば豪ドル相場の重しとなるだろう。また、27日(水)には豪7月CPI、28日(木)には豪4~6月期民間設備投資、米7月PCEデフレーターなどが予定されている。特に、米豪インフレ指標の結果次第で相場が乱高下しやすいため警戒しておきたい。他方、ジャクソンホール会合を経てグローバルに堅調地合いとなっている株式相場が豪ドルをサポートする可能性も視野に入れておくべきだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(8/18~8/22)の値動き: (対ドル) 安値 0.6415 高値 0.6524 終値 0.6491
(対円) 安値 94.40 高値 96.20 終値 95.38



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。